

説教余滴、2019年2月10日、玉淀園、

社会福祉事業に牧師として初めて関わったのは、埼玉県寄居町にある康保会玉淀園（遠藤省三園長、元牧師）でした。荒川の上流、長瀬よりは少し下流。戦国時代、北条方の要衝・玉淀城があった崖を望む河川敷、桜と紅葉の名所に造られた乳児院です。ある日、電話で嬰兒の葬儀を依頼されました。同月に2回、しかしその後は殆どありませんでした。その後、職員の聖書研究をさせていただきました。

玉淀園の園長の言葉を記憶しています。

「入園した子どもが亡くなると、若い人たちの士気がガクッと落ちるので、引き受けたくないけど、止むを得ない時もあるね。いつぞやは無理を願いました。」

多くの若い女子を採用しますが、信仰的な熱意で来る人は、理屈が多くて、すぐ辞めてしまいます。むしろ、仕事として割り切ってくる人のほうが良く働きます。

戦前？酒田市の教会の牧師でした。郵便局に給与が振り込まれてきますが、局員が眼を丸くしていたもんですよ。アメリカからの支給で、格段の違いだったんでしょう。」

ある時、教会の前に旗付きの立派な乗用車が停まり、園長先生が降りてきました。「持田先生、毎日新聞の記者が迎えに来たので、これから東京まで行きます。途中まででもいかがですか。」車中、先生の権勢のようなものを感じました。全国の乳児院団体を統合した指導者として、記者は鄭重に取材していました。どこまで同乗したか、記憶がありません。

ある夏の始まる頃、「わたしが死んだら葬式をやってくださいよ。」お元気で、なかなか死にそうに見えません。お引き受けして、そのまま教会員とのアメリカ、メキシコの旅に出かけました。帰国すると、既に先生は亡くなられていました。東京のご家族のもとに引き取られ、そちらの有名な牧師の司式で葬儀が執行されました。たいへん申し訳なかった、と今でも悔やんでいます。